

病害虫発生予察情報(7月予報)

令和8年6月30日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均年値)	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：少 (発病株率 1.9%)	6月中下旬の葉いもち発生量：なし(－) 6月中下旬の置き苗いもち発生：なし(－) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：ほぼ同年並(±)
	ごま葉枯病	発生量：やや多 (発病株率 3.7%)	6月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	発生量：やや少 (発病株率 0.2%)	6月中下旬の縞葉枯病発生量：並(発生なし)(±) 6月中下旬のヒメトビウンカ発生量：少(発生なし)(－) 6月の予察灯誘殺数：少(誘殺なし)(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	セジロウンカ	発生量：並 (寄生虫数 0.5 頭/株)	6月中下旬発生量：少(発生なし)(－) 6月の予察灯誘殺数：並(誘殺なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	トビイロウンカ	発生量：並 (寄生虫数 0.002 頭/株)	6月中下旬発生量：並(発生なし)(±) 6月の予察灯誘殺数：並(誘殺なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	斑点米カメムシ類	発生量：並 (年平均捕獲数 20.3 頭/30 回 すくいとり)	6月中下旬発生量：少(－) 6月の予察灯誘殺数：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
かんしょ	シロイチモジヨトウ	発生量：多 (寄生虫数 0.1 頭/m ²)	6月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	ナカジロシタバ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.3 頭/m ²)	6月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	イモキバガ	発生量：やや少 (巻葉数 1.4 葉/m ²)	6月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	エビガラスズメ	発生量：多 (寄生虫数 0.02 頭/m ²)	6月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
温州みかん	かいよう病	発生量：多 (発病度(果)0.1)	6月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	黒点病	発生量：やや多 (発病度 0.6)	6月上中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (寄生果率 0.5%)	6月上中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ同年並(±)
	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率 7.0%)	6月上中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：ほぼ同年並(±)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果)0.4)	6月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや少	6月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：やや少	越冬量：少 (－) かんきつ寄生数：少 (－) 病害虫防除員調査：多 (＋) 予察灯誘殺数：少 (－) フェロモントラップ誘殺数：少 (－) ヒノキ着果量：多 (＋) ヒノキ寄生数：少 (－) ヒノキ球果吸汁痕数：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
茶	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 16.1 葉/1.25 m ²)	6月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	もち病	発生量：やや少 (病葉数 6.5 葉/1.25 m ²)	6月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	輪斑病	発生量：やや多 (病葉数 20.2 葉/1.25 m ²)	6月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋)
	チャハマキ	発生量：並 (寄生虫数 0.5 頭/1.25 m ²) 発生時期：並	6月上中旬発生量：やや少 (－) フェロモントラップ誘殺数：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：多 (寄生虫数 0.3 頭/1.25 m ²) 発生時期：並	6月上中旬発生量：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノホソガ	発生量：やや少 (巻葉数 1.0 葉/1.25 m ²) 発生時期：並	6月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 11.6 頭/4 か所)	6月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：多 (叩き落とし虫数 2.9 頭/4 か所)	6月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：多 (寄生株率 0.6%) 発生時期：やや早い	6月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：並 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 か所)	6月上中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
きく (施設)	黒斑病・褐斑病	発生量：並 (発病株率：0.3%)	6月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	アザミウマ類	発生量：並 (被害株率：15.2%)	6月中旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率：0.1%)	6月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	オオタバコガ	発生量：多 (被害株率：1.4%)	6月中旬発生量：多 (+) フェロモントラップ誘殺数：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	ハダニ類	発生量：やや少 (発病株率 4.9%)	6月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期について記載がある場合は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimu/sho/1058658/boujo/index.html>



静岡県総合防除計画 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/nogyo/nouyaku/1003316/1062325.html>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時の生育は、早期栽培が分けつ期、普通期栽培が活着期～分けつ期であった（調査期間：6月16～23日）。なお、病害虫防除員の情報によると、生育は概ね平年並である。

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.3%）。置き苗いもちの発生も、みられなかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をあまり助長しない（感染好適条件：気温15～25℃、葉面湿潤時間10時間以上で、その前5日間の平均気温が20～25℃の時）。

防除対策

- ・置き苗は本田に植え付けた株より早期に葉いもちが発生し、いもち病の伝染源になりやすい。補植する場合はできるだけ早く行い、不要な苗は速やかに処分する。
- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。上位1～3葉に病斑が見られる場合は適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に急性型病斑（周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布を行う。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっている。本県でも耐性菌の発生が懸念されるため、QoI剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「[農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準の「参考資料」内「殺菌剤使用ガイドライン（日本植物病理学会 殺菌剤耐性菌研究会）](#)」を参照）。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、1ほ場で多発が見られたため、平均発病株率は0.8%（平年0.01%）と平年より多かったが、他のほ場は平年並であった。
- ・本病は近年全国的に発生面積が増加している。発病には土壌条件の影響が大きいですが、気象条件については、25～30℃、湿度90%前後の結露しやすい状況が感染に好適である。また出穂期以降の高温はイネの本病に対する抵抗力が低下する。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・主要肥料成分では窒素およびカリの欠乏が発病を助長する。このほか可給態ケイ酸、鉄、マンガン、マグネシウムの欠乏と石灰の多用が発病を助長するとされている。そのため肥料切れに注意し、必要に応じ穂肥などを施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

予報の根拠

- ・6月中下旬の巡回調査では、縞葉枯病の発生は確認されなかった（平年発病株率0.01%、前年発生なし）。

また、本病を媒介するヒメトビウンカの寄生は確認されなかった（平年最高寄生数 0.04 頭/株、前年 0.02 頭/株）。

- ・ 6 月 1～19 日時点の県内 4 か所の予察灯におけるヒメトビウンカの誘殺は確認されなかった。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、ヒメトビウンカの増殖をやや助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・ 本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。発病時期が早いほど被害が大きくなるため、幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。

●セジロウンカ

予報の根拠

- ・ 6 月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年最高寄生数 0.02 頭/株）。
- ・ 6 月 1～19 日時点の県内 4ヶ所の予察灯における誘殺は確認されなかった（平年 6 月誘殺なし）。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、増殖がやや助長される気象条件ではあるが、現時点で本種の発生は確認されていない。今後、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来する恐れがあるため、早期発見に努める。

防除対策

- ・ 株元をよく観察し、成幼虫が多寄生する場合やすず病が発生している場合は直ちに薬剤を散布する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・ 6 月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年 6 月発生なし）。
- ・ 6 月 1～19 日時点の県内 4 か所の予察灯における誘殺は確認されなかった（平年 6 月誘殺なし）。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、増殖がやや助長される気象条件ではあるが、現時点で本種の発生は確認されていない。今後、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来する恐れがあるため、早期発見に努める。

防除対策

- ・ 本種は世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。
- ・ 本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、梅雨明け後～出穂前及びその 10～14 日後の計 2 回の防除を検討する。また、本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、残効が切れる時期のため、追加の防除を検討する。

●斑点米カメムシ類（アサジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、イネカメムシ等）

予報の根拠

- ・ 6 月中下旬の水田畦畔・雑草地等における発生は、平年より少なかった（30 回すくいとり平均捕獲数：4.3 頭、平年 14.6 頭）。
- ・ 6 月 1～19 日時点の県内 4 か所の予察灯における誘殺数は、平年より少なく推移している。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、斑点米カメムシ類の密度低下に有効である。ただし、斑点米カメムシ類を雑草から水田内に移動させないよう、出穂 10 日前には除草を終了する。
- ・出穂後は水田内の斑点米カメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田は斑点米カメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・成虫侵入期となる穂揃期（すべての茎のうち 80%の茎で穂が出た状態）とその 7～10 日後（幼虫ふ化期）の 2 回薬剤散布を行うと防除効果が高い。ただし、粒剤を散布する場合は出穂期（すべての茎のうち 50% 前後の茎で穂が出た状態）に散布する。イネカメムシの発生が目立つ場合は、出穂期に薬剤散布する。

<その他の病害虫>

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

発生状況

- ・6 月中下旬の巡回調査では、発生面積率は 56%（平年 39%）と平年より多かった。また、病害虫防除員 12 名中 7 名から、多いまたはやや多いとの報告があった。

防除対策

- ・移植後 2～3 週間は、食害を抑制するために浅水管理（4 cm 以下（理想は 1 cm 以下））に努める。
- ・発生地域では移植後の薬剤処理を実施する。
- ・水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【かんしょ】

<生育の概況等>

生育は平年並。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・6 月上旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数 0.4 頭/m²（平年発生なし）と平年より多かった。
- ・1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場観察により早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・6 月上旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数 0.6 頭/m²（平年 0.7 頭/m²）と平年並であった。
- ・1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、例年発生するほ場では観察により早期発見に努める。
- ・若齢幼虫が多数見られる場合は薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・6 月上旬の巡回調査では、平均巻葉数は 0.1 葉/m²（平年 0.4 葉/m²）と平年より少なかった。
- ・1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年、葉の繁茂に伴い巻葉数は増加する。多発する場合は防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数 0.4 頭/m²(平成0.1 頭/m²) と平成より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

<生育の概況等>

県果樹研究センター（静岡市）における開花盛期は宮川早生で5月8日（平成5月11日）、青島温州で5月4日（平成5月6日）、県伊豆農業研究センター（東伊豆町）における青島温州の開花盛期は5月7日（平成5月10日）であり、平成より3日程度早かった。また、病害虫防除員からの報告によると、生育は平成並～数日早く、着果量は平成並～やや多い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 6月上中旬の巡回調査では、葉の平均発病度は3.2（平成0.3）と平成より多かった。一部園地では、果実においても僅かに発生が見られた（平成発病度0.01）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、本病の発生をやや助長する。強風や強い雨が発生した場合はさらに助長する。

防除対策

- ・ 中晩柑類と近接している園では感染する可能性が高まるため注意する。
- ・ 温州みかんは本病に対して抵抗性を持つが、昨年より葉において微小な病斑が多く確認されている。
- ・ 病原菌の生育適温は20～30℃であり、風雨により伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・ 温州みかんは中晩柑類に比べ銅剤で薬害が出やすい。銅剤を散布する際は薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・ 夏芽でのハモグリガ被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣、防風網の整備など防風対策をする。
- ・ 発生状況及び防除対策については、[「令和8年度技術情報第2号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）」](#)も参照する。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 6月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平成発病度0.03）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 20～27℃の水滴中で孢子が発芽し、葉や果実に感染して黒点ができる。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・ 枯枝は伝染源になるため園地から除去する。

- ・防除実施日以降の累積降雨量が 250～300mm、または防除実施日から 25～30 日経過した時点が次の防除実施の目安となる。アメダスなど気象データを確認し、栽培地域の累積降雨量が増えた場合は防除を早めて実施する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 6 月上中旬の巡回調査では、平均寄生果率は 0.1（平年 0.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、第 3 世代成虫の発生時期は 6 月 23 日～7 月 8 日、第 4 世代成虫は同様に 7 月 14 日～28 日と予想される（昨年より 3 日程度早い）。
- ・ 産地ごとの詳細な防除時期は、病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」を参照する。
- ・ 本種各世代において、飛来最盛日の 1 週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・ 光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率 60%以下の園地で、反射率 90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。
- ・ 炭酸カルシウム微粉末剤を 6 月に散布した園地では、7 月中旬にも同剤を散布することにより、6～8 月にかけて化学殺虫剤を 3～4 回散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。なお、梅雨明け以降の散布は、収穫時期に白斑が残りやすくなるため注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 6 月上中旬の巡回調査における平均寄生葉率は 3.3%（平年 4.7%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 7～8 月の盛夏期は高温により本種の増殖は抑制される。1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 盛夏期は土着天敵（カブリダニ類など）の活動が活発になることから、本種は減少する傾向にある。ただし、多発園（寄生葉率が 30%を超える園地）では薬剤防除を行う。

<その他病害虫>

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・ 卵やふ化幼虫を対象として、7 月上旬に主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑類】

<生育の概況等>

県伊豆農業研究センター（東伊豆町）における開花盛期は平年並～やや早かった。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 6 月上中旬の巡回調査では、果実での発生は認められなかった（平年発病度 0.05）。葉の平均発病度は 1.6（平年 0.7）と平年より多かった。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。強風や強い雨が発生した場合はさらに助長する。

防除対策

- ・病原菌の生育適温は 20～30℃であり、風雨により伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・銅材を散布する際は、葉害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣、防風網の整備など防風対策をする。
- ・発生状況及び防除対策については、[「令和8年度技術情報第2号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）」](#)も参照する。

【キウイフルーツ】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並～やや早く、着果量は平年並～やや多い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、発病葉率は7.9%（平年8.5%）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・感染適温は10～20℃（特に18℃付近）であり、風雨により伝染する。
- ・平均気温が25℃を超えると病勢が停滞する。9月下旬～10月上旬になると平均気温が20℃付近まで低下するため、菌の増殖が再び活発化する。初夏までに発病がみられた樹については秋以降の経過に注意し、再び発病がみられた際は収穫後にコサイド3000を散布する。
- ・樹体内に病原細菌が侵入すると根本的な治療方法はないため、防除は予防が中心となる。周囲への感染を防ぐため、発病樹の伐採あるいは発病部位の切除を行い、園外の土中に埋めるなど適切に処分する。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣、防風網の整備など防風対策をする。
- ・管理作業時に付着した感染樹の樹液により感染が拡大するため、せん定器具や手指はこまめに消毒する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「令和8年度技術情報第1号（キウイフルーツかいよう病）」](#)も参照する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・本年2月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量／落葉1㎡は、県平均0.2頭（平年1.2頭）と平年より少なかった。
- ・5月上旬における温州みかん巡回調査（県内30地点）では、花での叩き落とし調査による本虫の寄生は認められなかった（平年1.4頭／10か所）。また、病害虫防除員による同様の調査（県内67地点）では、本虫の寄生数は3.1頭／10か所（9年平均1.2頭）と平年より多かった。なお、多くの地域では本虫の寄生数は少なかったが、中部や西部の一部地域で花への多寄生が認められている。
- ・県内4か所の予察灯における6月1日～20日の合計誘殺数の平均は、15.5頭（平年163頭）と平年より少なかった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが11.1頭（平年104頭）、ツヤアオカメムシが4.4頭（平年57.8頭）、クサギカメムシが誘殺なし（平年1.2頭）であった。

- ・県内6か所のフェロモントラップにおける6月1日～20日の合計誘殺数の平均は、40.4頭（平年116頭）と平年より少なかった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが37.7頭（平年93.9頭）、ツヤアオカメムシが1.5頭（平年18.1頭）、クサギカメムシが1.1頭（平年3.9頭）であった。
- ・ヒノキ球果の着果量（指数）は、県平均7.9（平年4.5）と平年より多かった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が多いと新成虫の増殖は助長される。
- ・ヒノキ球果における本虫の平均寄生数は、10結果枝あたり0.2頭（平年0.4頭）と平年より少なかった。
- ・6月上中旬のヒノキ球果における本虫の吸汁痕／球果は0.01（平年0.2）であり、平年より少なかった。なお、本県ではヒノキ球果における吸汁痕が20に近づくと、本虫がヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。
- ・1か月予報を加味すると、7月の果樹園への飛来数は平年よりやや少ないと予想される。

防除対策

- ・本虫の越冬量や誘殺数が少なくても、一部園地ではカメムシ類が飛来することもあるため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける発生状況に注意する。
- ・静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・これら最新情報を確認し、本虫の飛来が予想される場合には、ほ場の見回りをこまめに行い、飛来状況に応じて薬剤防除を検討する。
- ・薬剤防除については、「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。

【茶】

<生育の概況等>

6月上中旬の巡回調査では、二番茶摘採前～整枝後と、地域や茶園により異なった。

●炭疽病

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は2.5葉/1.25㎡（平年4.9葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨明けまでは感染機会が多くなる。防除は三番茶萌芽期から開葉期に実施し、例年発生が見られる茶園では萌芽期と2～3葉開葉期の2回防除を行う。なお、2回防除を実施する際には、1回目に予防効果の高い剤を使用し、2回目に治療効果の高い剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は0.1葉/1.25㎡（平年8.2葉/1.25㎡）と平年よりも少なかった。
- ・本病の生育適温は16～20℃で、新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では特に発生しやすい。二番茶期に発生が見られた茶園や山間地の茶園では、三番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。

●輪斑病

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均発病葉数は2.5葉/1.25㎡（平年2.4葉/1.25㎡）と平年並だった。
- ・本病の発病には25℃以上の高い気温が好適である。他の病害と異なり、降雨の多少は発生程度に影響しない。1か月予報によると、気温は平年よりも高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が主な発病部位になるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●チャハマキ、チャノココクモンハマキ

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は0.20頭/1.25㎡（平年0.25頭/1.25㎡）と平年よりやや少なく、チャノココクモンハマキの平均寄生幼虫数は0.16頭/1.25㎡（平年0.05頭/1.25㎡）と平年より多かった。
- ・5月下旬～6月中旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップにおける成虫誘殺状況では、両種とも誘殺数は平年並～多いため、茶園での発生も平年並～多いと予想される。
- ・5月下旬～6月中旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップにおける成虫誘殺状況では、両種とも発生時期はほぼ平年並である。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・第1世代成虫の発生時期はほぼ平年並で、第2世代幼虫を対象とした防除適期も平年並となる。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.2葉/1.25㎡（平年2.2葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。5月下旬～6月中旬までのフェロモントラップにおける成虫誘殺数は地域により異なり、発生時期はほぼ平年並となっている。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は2.8頭/4か所（平年9.4頭/4か所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は6.3頭/4か所（平年5.7頭/4か所）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は19.8%（平年8.2%）と平年より多かった。このため、令和8年6月26日付で「令和8年度病害虫発生予察注意報第2号」を発表した。
- ・アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第2世代予想ふ化最盛日は、7月13日（平年7月20日）と予測されている（6月22日時点）。1か月予報では、気温は平年より高いことから、他地域でも第2世代幼虫のふ化時期は平年よりやや早いと予想される。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察して、適期防除に努める。なお、県内各地のふ化最盛予想日は静岡県病害虫防除所ホームページ「防除時期等予測」で情報提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.11頭/4か所（平年0.14頭/4か所）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・7月に入ると成虫の発生が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他病害虫>

●新梢枯死症

- ・本症状は、主に新芽の包葉や不完全葉の離脱した傷口から発症する。包葉や不完全葉の多くは新芽の萌芽期から2～3葉期に離脱するので、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。また逆に、過乾燥も発症を助長する。
- ・昨年発生の多かった茶園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に2回程度防除する。なお、QoI剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

【きく(施設)】

＜生育の概況等＞

生育はほぼ平年並。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（過去7年間の平均発病株率0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では効果が低いため、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均被害株率は11.8%（過去7年間の平均14.8%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ クロゲハナアザミウマやネギアザミウマは葉を食害する。発生初期に葉裏まで十分に防除を行う。
- ・ ミカンキイロアザミウマは花を食害するため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.0%（過去7年間の平均1.2%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ アブラムシ類はウイルス病を媒介するため、寄生が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、チョウ目害虫による平均被害株率は2.2%（過去7年間の平均0.4%）と平年より多かった。
- ・ 5月20日～6月20日までの浜松市のキク産地2か所および磐田市におけるフェロモントラップの誘殺数は、全地点で平年より多く推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年7月以降に発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均被害株率は0.4%（過去7年間の平均3.2%）と平年より少なかった。

- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生うちに防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の農薬の連用は避けるほか、気門封鎖剤も利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。

3. 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和8年6月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 6月27日から7月26日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	40	50
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	30	50	20
2週目	気温	10	40	50
3～4週目	気温	10	30	60

【予報の対象期間】

1か月	:	6月27日(土)～7月26日(日)
1週目	:	6月27日(土)～7月3日(金)
2週目	:	7月4日(土)～7月10日(金)
3～4週目	:	7月11日(土)～7月24日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html
--